

## 16～19世紀中央アジア史に関する一史料

——19世紀半ば成立の『ターリーヒ＝ラシーディー』附編——

澤田 稔・新免 康・堀 直

本発表では、ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所蔵写本No. 10191に含まれる、『ターリーヒ＝ラシーディー』テュルク語訳の附編（仮称『ホージャ＝ムハンマド＝シャリーフの歴史』）について紹介し、その史料としての性格・価値について検討した。

当該附編は、中央アジアにおける著名なペルシア語の歴史書であるミールザー＝ハイダル＝ドグラート『ターリーヒ＝ラシーディー』のテュルク語への翻訳（69b-344a葉）の後に、訳者であるホージャ＝ムハンマド＝シャリーフ Khwāja Muḥammad Sharīf が『ターリーヒ＝ラシーディー』の叙述終了の時代から、自らの19世紀半ばまでの歴史を叙述したものである（344a-416a葉）。16世紀～18世紀半ばの清朝による東トルキスタン征服までの部分では東西トルキスタンの歴史が扱われ、それ以降については東トルキスタン、とくにカシュガルをめぐる状況について叙述され、末尾にワクフ文書の写しを掲げるという、中央アジアの歴史書としてユニークな形態をもつ。著者のホージャ＝ムハンマド＝シャリーフは、清朝統治下、19世紀の半ばにカシュガルのハーキム＝ベグの地位にあったゾフル＝アッデーン Zohūr al-Dīn の下で著述活動に従事した知識人と推定される。

本史料は、大きく三つの部分に分かれると考えられる。これら三部分の内容の概要を明らかにし、他史料との比較を中心にいくらか検討を加えた。 (新免)

第一に、当該史料の清朝征服以前の記事が載せられている部分、すなわち、同写本の344a-400a葉、192節-276節については、別の類似する史料である『カシュガル史』や『シャー＝マフムードの歴史』との比較を試みた。この部分の全体的な構成としては、192節-276節の節分けが行われているが、その節番号は朱インクにより本文と同じ筆跡で左右の欄外に書き込まれている。例えば、192節は「yüz toqsan ikinci faşl」。節の表題は朱インクで本文中に書かれている。欄外に節番号の記入されていない表題が205, 223, 242各節のあとに見られるが、それらは黒インクで書かれている。内容的に見ると、東トルキスタン以外（シャイバーン朝、ムガル朝など）に関する節（192-202, 204-233, 235-245, 248-249, 251-254節）と、東トルキスタン（ヤルカンド＝ハーン国、ホージャ家）に関する節（203, 234, 246-247,

250, 255-276節) とに二大別できる。前者のグループにおいては、ある節と次の節の間に内容的な脈絡はほとんどなく、年代順に節を進めていくために没年や出来事の年代が出てくる話を並べているようである。

後者のヤルカンド=ハーン国やホージャ家に関するグループの節は、節の表題と内容において『カシュガル史』と類似している。しかし、『シャー=マフムードの歴史』とは、節の構成や内容において異なることが多い。また、これは全体を通じて言えることであるが、年代記載への強い志向が見られることが本史料の特徴にもなっている。(澤田)

第二に、清朝による東トルキスタン征服から著者の同時代に至る叙述部分(400a-411a葉)がある。その基本構成は、①清朝による東トルキスタン征服の経緯(400a-402a葉) ②清朝統治下のカシュガルの状況(402a-411a葉)に分かれる。前者の部分では、同時期におけるカシュガル=ホージャ家アフアーク統の対黒山党・対清朝の軍事的・政治的活動と、その政治的・軍事的プロセスにおける、各地域の世俗的な有力者であるベグたちとの関係について述べられており、叙述は比較的簡潔であるものの、清朝側の編纂史料で知られていない情報もいくらか得ることができる。

後者の部分では、カシュガルの歴代のハーキム=ベグの出自、各時代に起こった事件の経緯、それら事件におけるハーキム=ベグの対応、水利事業やマドラサ建設など各ハーキムの事績、などについてクロノロジカルなデータとともに伝えている。この時期の東トルキスタンに関するウイグル人側の叙述は希少であり、とくに18世紀後半～19世紀前半の清朝統治下におけるカシュガルという地域社会の状況を明らかにするための貴重なデータを提供する点で、その史料としての有用性は高いと言えよう。清朝側史料との対照など、今後の検討がとくに要請される所以である。(新免)

第三は、1836年のワクフ文書である。当該文書は、本写本の巻末(411a葉9行目から416a葉13行目)に筆写・収録されている。2004年8月にタシュケントで現写本に接して、以前入手したコピーでは欠けていた赤インクによる記事を確認できた。それは、文書の冒頭(411a葉9行目)に、Shu kitapda zikr qilinghan medrassaning tawallisa とあるタイトルで、従来は「何故この文書が巻末付いているのか?」が疑問であったが、写本中に言及されたメドレッセに関連する、参考資料が収録の理由であることが判明した。

文書の内容は、AH1252年 Muḥarram 月 22日(1836年5月9日・道光16年3月24日)に、カシュガルで作成されたワクフ設定文書である。設定者は当時カシュガルの三品ハーキム=ベグであったトゥルファン郡王家出身のゾフル=アッデーン。彼はカシュガルのSarmand郷 Faynab村の Sayyid Jalāl al-Dīn Baghdādī廟の東側にひとつのメドレッセを建設し、そこの7種49人の宗務者のためにワクフを設定した。対象資産はカシュガル=オアシス内の各所の

不動産や水車など34の物件で、これらからの毎年の収益を25単位に分割し、上記の宗務者たちへの配分を規定している。

東トルキスタンでは、ワクフ文書そのものの公開例が少なく、また当該ワクフの設定者のゾフル=アッデーンはカシュガリアの文芸復興のパトロンとして有名ながら、極めて謎の多い人物であることなどから、この文書の精査には多く成果が期待できる。 (堀)

(富山大学人文学部)

(中央大学文学部)

(甲南大学文学部)